

第七章「ここから（仮）」（化城論品第七）02

著作権等は仏教学こころの研究所に帰属します。無断での複写・転用・引用などを禁じます。

出版前の原稿ですので、取り扱いには十分お気をつけください。皆様のご協力、ご理解のほど、宜しくお願い致します。

頁	読み下し文（平楽寺本）	偈	研究所 訳
159-9	即時に諸の梵天王、頭面に仏を礼し繞ること百千帀して、即ち天華を以て仏の上に散ず、其の所散の華須弥山の如し。竝に以て仏の菩提樹に供養す。其の菩提樹高さ十由旬なり。華の供養已って、各宮殿を以て彼の仏に奉上して、是の言を作さく、 唯我等を哀愍し饒益せられて、所献の宮殿願わくは納処を垂れたまえ。 時に諸の梵天王、即ち仏前に於て一心に声を同じゅうして、偈を以て頌して曰さく、		認めるや、その尊い人・仏の居られるところへと、大梵天たちは近づいていった。近づいてゆき、尊い人・仏の両足を頭をつけて挨拶をし、そのまわりを右めぐりに数多たびし、須弥山ほどの量の花冠を、その尊い人・仏の上に、また前にまき散らした、十由旬もの、かの菩提樹の上にもまき散らしたのであった。 花冠をまき散らし、そして、梵天の空飛ぶ宮殿をさし出すのであった。 『お受け取りください、尊い人・仏よ、お使いください、梵天の空飛ぶ宮殿を、わたしたちをお慈しみくださるのなら。成就者・仏よ、お受け取りください、梵天の空飛ぶ宮殿を、わたしたちをお慈しみくださるのなら』 さて、比丘たちよ、大梵天たちは、それぞれの空飛ぶ宮殿を、その尊い人・仏にさし出し、そして尊い人・仏に向かい、美しい詩を詩って、尊い人・仏を称えるのであった。
160-3	世尊は甚だ希有にして 値遇すること得べきこと難し 無量の功德を具して 能く一切を救護し	21	量りしれない人びとへの憂いと慈しみの心とを具えた未曾有／の勝利者・仏が／世に現われました／あなたは／主として//

160-4	天・人の大師として 世間を哀 愍したもう 十方の諸の衆生 普く皆饒益を 蒙る	21	教える人として／師として／お生まれになりました／この十方が今日／その恵みに与りました（２１）
160-5	我等が従り来る所は 五百万億 の国なり 深禅定の樂を捨てたることは 仏を供養せんが為の故なり	22	ここから／世界の数にして五万支劫もある／はるか彼方より／わたしたちは／やっまいりました//勝 利者・仏に／ご挨拶を申しあげるために／最もすぐれた空飛ぶ宮殿を／ことごとく／寄進させていただ いて（２２）
160-6	我等先世の福あって 宮殿甚だ 嚴飾せり 今以て世尊に奉る 唯願わくは 哀んで納受したまえ	23	わたしたちの爲した／前の世の業により／これらの空飛ぶ宮殿は／色とりどりでございます／お受け取 りください//わたしたちを／深くおぼし召されて／お使いになってください／世間を知り尽くした人・ 仏よ／お望みのままに（２３）
160-9	爾の時に諸の梵天王、偈をもっ て仏を讃め已って、各是の言を 作さく、唯願わくは世尊、法輪 を転じて衆生を度脱し、涅槃の 道を開きたまえ。時に諸の梵天 王、一心に声を同じゅうして、 偈を説いて言さく、		さて、比丘たちよ、大梵天たちは、その尊い人、大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなく さとした人・仏に向かい、このような美しい詩を詩って称え、そして尊い人・仏に申すのであった。『転 じてください、尊い人・仏よ、教えの輪を。世に転じてください、成就者・仏よ、教えの輪を。示して ください、尊い人・仏よ、静謐の境地を。お済いください、尊い人・仏よ、生きとし生けるものたちを。 歓ばせてください、尊い人・仏よ、人びとを。説き示してください、教えの主である尊い人・仏よ、そ の教えを、この世のために。梵天もいる、魔もいる、出家者も婆羅門もいる、神がみや人びと、阿修羅 もいる、この生きとし生けるものたちのために。それは、多くの人びとのためになり、幸せをもたらす ことでありましょう。世の中を憂えられ、群れ居る神がみや人間たちの役に立ち、ためになり、幸せを もたらすことになるでありましょう。』そして、比丘たちよ、五百万コーティ・ナユタもの梵天たちが、 声を揃えて唱和し、その尊い人・仏に向かい次のような二つの美しい詩を詩って語りかけるのであった。

160-12	世雄両足尊 唯願わくは法を演説し 大慈悲の力を以て 苦悩の衆生を度したまえ	24	お示してください／尊い人・仏よ／その教えを／お説きください／二本の足にて立てるもの人間//その中の最もすぐれたる者・仏よ／そして慈しみの力を／お示してください／苦悩する生きとし生けるものたちを／お済いください（24）
		25	得難きものでございます／世を照らす光・仏に／まみえるということは／あたかも／優曇華の花を//目のあたりにするように／あなたは出現されました／大いなる英雄・仏よ／わたしたちは心より請う者でございます／尊い人・仏に（25）
161-2	爾の時に大通智勝如来、黙然として之を許したもう。		そのとき、比丘たちよ、その尊い人・仏は、彼ら大梵天たちに対し、黙して応ずるのであった。
161-2	又諸の比丘、東南方五百万億の国土の諸の大梵王、		そして、また、そのとき、比丘たちよ、東南の方角にある、五百万コーティ・ナユタもの世界において、
161-3	各自ら宮殿の光明照曜して		梵天の空飛ぶ宮殿が一際輝き、照り映え、明るく、気高く、威光を放っているのであった。
161-3	昔より未だ有らざる所なるをもって、歡喜踊躍し希有の心を生じて、		比丘たちよ、大梵天たちは思うのであった。＜梵天たちの乗り物・宮殿が一際輝き、照り映え、明るく、気高く、威光を放っている。これは何の前兆なのであろうか＞と。
161-4	即ち各相詣って共に此の事を議す。時に彼の衆の中に一りの大梵天王あり、名を大悲という。諸の梵衆の為に偈を説いて言わく、		そして、比丘たちよ、それら、五百万コーティ・ナユタもの世界における、大梵天たる者たちは、たがいの住まいを訪れ、語りあうのであった。さて、そのとき、比丘たちよ、大悲という名の大梵天が、梵天たちの大集団に、詩を詩って語りかけるのであった。
161-7	是の事何の因縁あって 此の如き相を現ずる 我等が諸の宮殿 光明昔より未だ有らず	26	みなさん／何の前兆なのでしょう／この 今 わたしたちが眼にしている／ありさまは／梵天の空飛ぶ宮殿が//みんな／とても見事に輝いて／それが 今 こうして／見えて／います（26）

161-8	大徳の天の生ぜるとやせん 仏の世間に出でたまえるとやせん 未だ曾て此の相を見ず 当に共に一心に求むべし	27	彼らのあの空飛ぶ宮殿が／勢いよく／すべて／輝いているのは／福德の神の子が//もしや 今／ここに来きているというのでしょうか／その神の子の威力で／すべての空飛ぶ宮殿が／輝いているのでしょうか（２７）
		28	いや／そうではありますまい／むしろ／二本の足で立つ者の最高の者／仏陀が//この世に生まれ出でたかもしれないのです／今／彼らの空飛ぶ宮殿は／仏陀の威神力によって／このように輝いているのに違いのないのです（２８）
161-9	千万億の土を過ぐとも 光を尋ねて共に之を推せん 多くは是れ仏の世に出でて 苦の衆生を度脱したもうならん	29	みんなで／いっしょに／世に出た仏陀を探さがしましょう／この現象の理由は／そんな ちょっとしたことではない／はずです//こんなことは／今までに／見られたことのない／現象なのです（２９）
		30	東西南北／四方に／行こう／幾千万億もの地／どこどこまでも／行こう//明らかなのだ／世に／今 仏が／出現されることは（３０）
161-12	爾の時に五百万億の諸の梵天王、宮殿と俱に、各衣袂を以て諸の天華を盛って、共に西北方に詣いて是の相を推尋するに、大通智勝如来の道場菩提樹下に処し師子座に坐して、諸天・龍王・乾闥婆・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の恭敬圍繞せるを見、及び十六王子の仏に転法輪を請ずるを見る。		さて、そこで、比丘たちよ、かの五百万コーティ・ナユタもの梵天たちは、それぞれ、梵天の空飛ぶ天の宮殿に乗り込み、須弥山ほどの量の天の花冠を持って、四方を順次訪ね赴き、北西の方角へとつき進んでいきました。そしてさらに、比丘たちよ、彼ら、大梵天たちは見ることになるのです。北西の方角で、その尊い人、大神通智勝如来・勝れた人・正しくあますところなくさとした人・仏が、菩提樹の下で、最上のさとり座に着かれたのを。獅子の座に坐り、神や龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽など、人や人以外のものたちによって囲まれ、敬われ、そしてまたあの十六人の、息子たちである王子たちによって彼が教えの輪を転じることを請われているのを見たのです。